

流しのマシンコ弾き アズマリ

川瀬 慈

エチオピアの音楽職能民アズマリはまことにしたたかなひとたちである。タッジベットやブンナベットなどの酒場に、単弦楽器マシンコを携えどこからともなく現われ、時の政権の話題から歴史上の出来事、男女の恋愛に至るまで、どんな深刻な話題もおもしろおかしく歌のなかに織り込んでゆく。彼らはまたころづけを受け取るためには、あらゆる褒め言葉で客を攻めたてもする。少々金額をけちればアズマリが得意とする擲楡の“口撃”にさらされるため、こちらもそう迂闊に楽しんでばかりはいられない。あるとき渡したお金が足りなかったのか、“日本からやってきたグラゲ（一般に、けちを連想させるエスニック・グループの名）”と、わたしはマシンコのメロディにのせられ笑いにされたこともあった。一方、酒場に集った聴衆も積極的にアズマリに言葉を投げかける。アズマリは一字一句間違えずにそれらを歌に乗せ、人々のコミュニケーションの仲介役をはたすのである。時として奏者と聴き手という区別すらも曖昧にしてしまうアズマリと人々の豊かなやりとりは、決して楽譜に還元できるものではないだろう。

アズマリは古くから、エチオピアを広範にわたる音楽を奏で遊行していたと推測される。なかには王侯貴族をパトロンに持ち、歌の中で主を褒め称えるだけでなく、辛辣な言葉でその行政を批判するものもいたといわれる。また、戦場にあらわれては兵士を鼓舞する歌を唄い、同時に兵士の手柄を報告する役割を担うものもいたらしい。

ゴンダールの南、地図上ではタナ湖の少し上あたりにアズマリの集落が点在する。普段は農牧を営む彼らの多くは、結婚式のシーズンやエチオピア正教に関わる宗教行事の折などには、単独、もしくは男

女のカップルで、ゴンダールやメカレー、バハルダールなど近隣の町へ赴く。祝祭の場での演奏は、アズマリにとって稼ぎ時の絶好のチャンスなのである。しかしながら町中では一般的にアズマリの社会的な地位は低く、下層の放浪芸人として人々にみられがちである。演奏の場を求めて彼らが通りをさまよふときの人々の冷淡な待遇、ゴンダールの酒場での酔っ払い客のアズマリに対する邪険な態度、傍観者でしかありえない私でも重苦しい空気を味わうことが幾度かあった。

そういったアズマリに対する低層民的イメージはアジスアベバ、カサンチスのアズマリたちには必ずしも似合わない。カサンチスに立ち並ぶアズマリベットと呼ばれるバーでは、民族衣装に身を包んだ店の専属アズマリたちによる、ショーとして洗練されたパフォーマンスが外国人観光客をも惹きつけている。エチオピアのポップソングをレパートリーにとりいれたり、英語の褒め言葉によって外国人客のチップを誘うアズマリもカサンチスでは珍しくない。選び抜かれたアズマリが、ヨーロッパ諸国を“エチオピア伝統芸能の担い手”として紹介され、巡回公演することも毎年の恒例になりつつある。アズマリであるということの意味は少しずつ変わっていくのかもしれない。

私はアズマリの理解にむけての原点を、演奏の場における彼らと人々との豊かなやりとりにもとめたいと考える。さまざまなかたちをとりつつも、たくましく生きていくであろうアズマリの芸の神髄をそこにみるからに他ならない。

(かわせ いつし 京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科)